

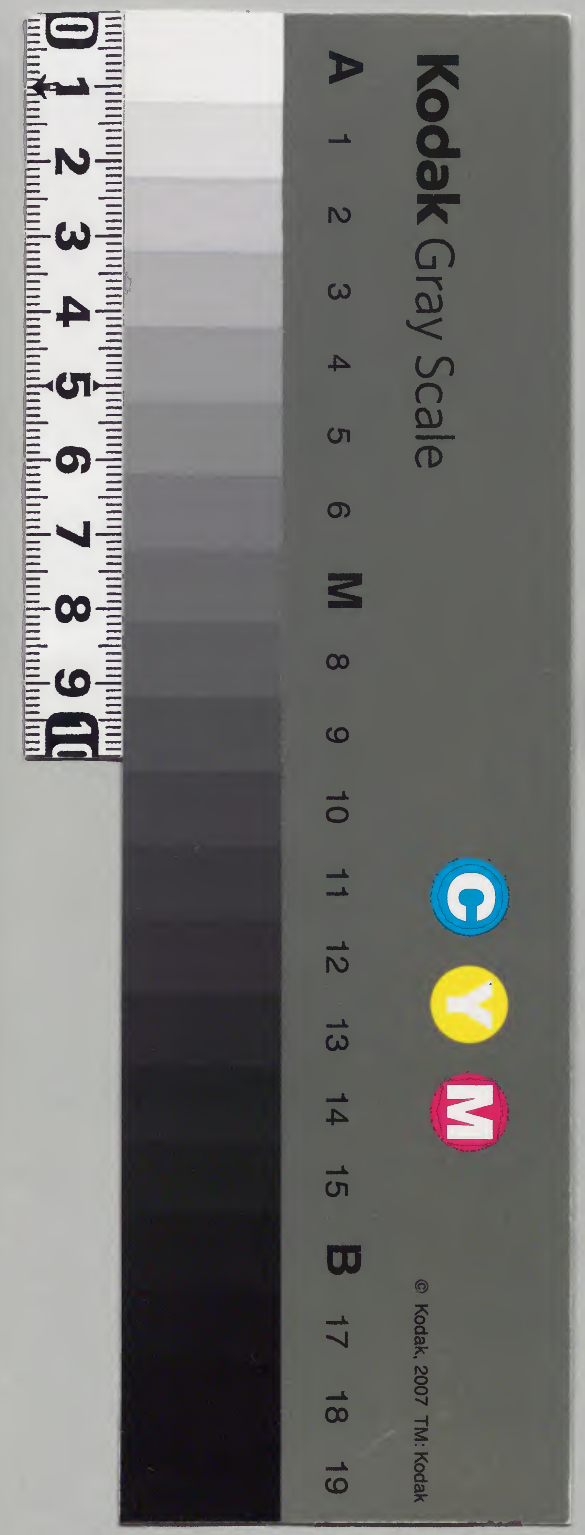
重修真書太閤記

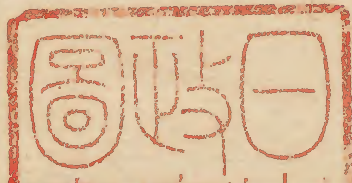
十編
二

一	二	三	和書門
〇	九	〇	
冊	架	函	號

七	一	六	和書
一	〇	二	
架	冊	號	類

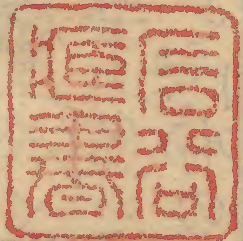
內閣文庫	
番號	和 16221
冊數	110(92)
函號	171 39





重修真書太閤記十編卷之四

淺草文庫



町田久成獻納之章

秀吉卿大納言任官の事
并木多平八郎忠勝意見の事

天正十二年甲申ハ漸飯妹の二卦ニハ當る年々々
十二周の中元己亥天父八年より四十六年か
太歳ハ申方太陰ハ子方害氣申の方入泊と害
氣の泊る処その害をかくと云う實あるか
津川玄蕃久り長嶋城ハ清洲の城の坤ニ當る即
害氣より内府信雄公ハ殺すといふ事起
畿内東國靜謐あり別々々尾州濃州ハ戰

塲とありしう百姓地下人耕作の業と安んじら
る能く諸職商人通功の路塞り老若男女巷々叫
ひ響寡孤獨窮と告る処なく朝暮悲歎の聲絶る里
ありけると秀吉卿あうくあはれしあひあはる
く無事の謀と廻らされまつ三州御陣へ書翰と呈
して四海太平の始と開りんとこと誥奉りまは北畠
殿と諷して和談の扱と入けるよ北畠殿元より強
て秀吉卿を殺戮せんとも思召さるし神速に其
事調ひ十一月十一日勢州赤名郡矢田河原に於て
和睦の對面ありその式嚴重しく短筆盡と
してよあはれともその荒増とひくよ記を内府の

御座へ東より西に向て龍鬚二帖と敷その上へ纒
綱縁の板帖御左に鍔刀木の御刀掛御後御持筒
御持弓御矢籠とく有へさ様あり御座より少
引下り小紋高麗の縁付一帖北より南に向て東西
へ三帖敷て進上物を居ありへり御座の對大
紋縁の帖二帖敷その上へ虎の皮の敷皮敷たるハ
宰相秀吉卿の座ありとを聞えさうその日午の刻
よ秀吉卿參上儲の幕み入へ内府腰輿にて御
出あり亭主の帷よ着玉ひ互み案内ありて出御其
座よ着玉へハ秀吉卿進上の太刀足立清左衛門尉
是を披露しまへ内府より國次の太刀を下さる同

清左衛門尉是と傳ふ後人々申けるハ國次
 へ國續あり續へて國と渡りあふることとやと
 判しつひとめさ合けることとあひ合を
 末の姿のいふめと今日を関さあふ同十六日
 内府公も清洲へ還御あるハ秀吉卿も大坂へ歸り
 外畿内静謐して四民万歳と唱えけしハ洛中洛
 外歡娛の聲九重の雲上よ聞之偏ハ是參議秀吉卿
 肺肝と碎さむハいかたれうと敵感よこみ淺り
 らび褒賞の朝恩の帝澤の至らざるに似たり
 とて臨時の陣議ありて秀吉卿官位昇進の御内意
 ありけしハ勅使大坂へ參向あり秀吉卿うへむ

山海の珍膳と盡し引出物の数々綾羅錦繡金銀珠
 玉ひうりまはゆさ追ありしハ傳奏のあつろよ
 さそむく大量ある秀吉うかめする人天下の權と
 執あひたるんよハ世叟富貴よ上下安樂の時と得
 へたとたのまれけり然御内意ハ内大臣よ上らと
 めくとありけりて秀吉卿以の外よ仰天し謹て申
 ける様あれハ勅定の御答よゆるハ秀吉う心の中
 と申いあり秀吉ハ邊土遠境の地下人の家よ生を
 てゆつハ勅諭とるこハ心得ていへとも冠鳥
 帽子笏中啓履草鞋の差別とハ辨不申い併官ハ位

大附言一終巻下

一、從ひ位への人の品より從ふとて承りてい然に
 中少將を経て衛府の督より進み左右の大將を兼て
 大中納言より昇り大臣より登る其例常の通り又ハ參
 議より納言より進み大臣より進る共云く秀吉の如
 くも朝廷の御光よりて末代陵夷の弊風を改
 めんと欲をいりんと我身より越轉替上の例をふ
 一、申へとも抑大臣より昇進存もよりい因て勅使より
 從ひ上洛仕り參内より勅定の御請と申上いへてい
 とて直より上洛あり傳奏との由と奏聞をい處秀吉
 へ武畧よの常より越のいあり禮義とも存りけ
 るとて是蓋禁闕の重寄天下の儀形此人ありてい

と宸襟よりも穩やうよ四海の太平眼前からんと
 歡感たくひかりけるみより十一月廿二日從二
 位より叙せらば權大納言より任りよ秀吉卿辭退再
 三より及ひいとも御聽かりりいハきかきち御
 請あり鎌倉右兵衛佐頼朝卿ハ參議中納言を経る
 直より大納言より任りよ玉ひい先例より寄さよふふるへ
 一、然るよ秀吉卿よりてよ亞相より任りよひい
 四海静謐四民鼓腹の王化を施りよらんため
 強三列御所と和議を調へるとんいありてい
 一、のいいりよより北畠殿へ此事と申さよひ
 一、のい北畠殿十一月十四日より濱松より參向あり

大内記十編卷四

うて酒井與四郎重忠の家と旅宿とあることごとく登
 城ありまつ御加勢としく御出張あり御禮を申
 ことありひげし御所も深く御悦あり十五日内
 府饗應の為濱松城下諏訪の社頭としく神事流鏑
 馬と興行ありその後射手の面々各々堅物遠射の
 の藝と施しげし勢州尾州の侍つとも舌と振
 るて感くつりけりけりやう城中に於て御酒宴
 とことある丁寧と盡されし内府もふり懇志
 と悦ひあへり然後内府申あはれ此程御加勢と
 て御出陣秀吉と弓矢と及びひあひしと返り辱ふ
 く悦ひ入てい但それより以前に秀吉と御所と何

の意趣もあはれしとまてうし信雄の事よりし
 何となく秀吉もうしこまり入ていなるあはれ信
 雄は御芳志の如く秀吉も同し様なる賜り
 ゆく幾重も悦ひ入い糸秀吉うて申てい秀
 吉年とて五十ふちういとも子息と申のの
 り朝暮心こしく罷在い御和親の上ハ秀吉
 於て更し別心と存し不申あるし御息一人養ひ
 奉り家督とゆり申へしと呉々懇し申て
 い御同心い辱あ存いと内府厚く取持あひ
 げりより御所も別し思召もあはれしと
 秀吉御の申さる旨と従をたらし今年十一歳ふ

大岡政談十編卷四

四

約しむふ於義九とのと大坂へ上をまふへと趣と
 へ申されけるふ秀吉卿ふも又瀨松ふて神速ふ御
 納得ありけるを喜とせらと内府へも懇ふ情の
 くしの禮義を述べと太刀馬等を贈らせむひけりて
 後瀨松へ使者を下され十二月月上旬於義九殿瀨松
 戎首途ありて十二日大坂ふ着むふ石川伯耆守數
 正次男勝千代本多作左衛門重次々次男仙千代
 御供したる廿一日於義九殿元服ありて從五位下
 叙侍後又任せられし羽柴侍從秀康と稱
 むふ御領ハ河内國ふて一萬石あり

流布本ふ信雄公あり龍川三郎兵衛尉勝雅と使
 としと瀨松ふ差下され信雄の口狀と述べ秀吉
 所望の次第と誦説ありける三列よと評義あ
 りとも去年八月一戦のころ秀吉の仁慈よと
 して歸國より二三日瀨松ふ休息ありて直ふ
 駿州へ軍馬と出され北条家亂入の防とあり
 へとも北条家出陣の沙汰なり三州御所八月
 中旬より十月まで待をむひしとも敵つひと
 來らざるしうの今ふと尾列へ御出張秀
 吉と約束の合戦あをさる思召は處信
 雄と秀吉と和睦ありて彼ありて静謐せしむる

よし尾州より告来りしうの三州御所より尾
州御出陣し及ぶとありしめさるゝとあり此
条偽なり八月中旬より十月迄駿州へ御出張と
云ふ全く虚説あり七月十三日より清洲へ御座
ありて八月廿七日へ松平主殿助家忠秀吉卿の
兵と伺ふて樂田より至る廿八日秀吉小堀より放火
と御所清洲より岩倉へ御出張主殿助樂田より
田へ廿七日御所より清洲へ還御十月四日小牧
の要害御修復十七日濱松還御十月九日より清
洲へ御出張あり十一日信雄公と秀吉卿と和睦
も御所よりめさるゝ知食つるにありし即日石

川伯耆守と御使として秀吉へ和睦を賀しめ
なれは流布本の説更み取ふたる処なり去天正
十一年七月下旬濱松の督姫君小田原へ入御あ
りて北条氏直と婚禮とてのをさあひつと北
条と駿遠三の親睦の國より決して尾州御出
張の留守と伺ふことありしに然らば
又軍馬と出しめし理ありその上信雄直に濱松
より來る龍川三郎兵衛と使とせしめありしに
酒井榊原大久保本多等よりかひし信雄の義
なりし人なりし軍といはるゝ我君より置あり
ら和睦とい心のよきと取り行ひて相談し及ぶ

その上秀吉のため若君を取次て養子と
 んといふと又俗に尻頭よそののいふと云譬ふ
 似たり自身難義の時人となのも自身樂なる時
 人を外より又信雄りつみ小従て若君と大
 坂へ上をむと人質と送りむと同一と申て
 ゐれと止め奉らんと諫めと本多平八郎忠勝
 本多佐渡守正信二人をやり何ともいそ御所
 の仰み忠勝ハ腹心の功臣正信ハ万事を談を
 補佐の臣なりと有と云り正信いす佐渡守
 小任せ以上子天正十年歸參せしのみみてい
 ま暉近の列子いらは何ぞ補佐の臣と仰ら

るへさうつ忠勝秀吉の武威さうんなる上只今
 官大納言帝都守護の大臣ありさうと云ふ
 と御家長久の策ふあうびと申て於義九との上
 坂のことととめ奉りける御所元よりその思
 召ありけるさう事決たりとつへり是さ
 本多家の譜に傳へて信偽決りし
 浅野堀尾等濱松へ使者の事
 并於義九殿秀吉の養子とありあふ事
 羽柴權大納言平の秀吉卿ハ内大臣信雄公の返辭
 と聞あひ三州と和睦とてのひよりさひのさか
 らは於義九殿上坂ありしう日頃所望成就と

とて大い喜悅あり抑この於義丸とのと申へ三州
御所の庶子として天正二年二月八日遠州濱松産
目村にて誕生ありし母は池鯉鮒の社人永見
志摩守吉英り女あり一は村田意齋とのひの
の女ともいへり本多作左衛門重次の家より養育と
あひしと三歳の時岡崎三郎信康君とりめこそあ
ひしめて御所の見参り入あひしと然由あは
五歳よりあしをあふ長丸君とて於義丸とのと
上をあひしなり秀吉卿於義丸とのと對面ありて
その面さの猛く眼光ありて進退の雄々しと
と尋常の兒の類にあはるべと見あひし實三州御所の

御息あり秀吉嗣とあは堪たりと深く重ん
あひ自身立て御手と取奥へ伴あひし朝
日との并ふ北の御方うこそ近く呼とえ長途の
つとととさめあひし御りてあひの御膳
の御給仕は加藤虎之助福鳴市松と二人伺候した
とと御覽とて勢高と何と申ぞと仰られし
より加藤虎之助と名乗しうかつとあひ次
み太りたる誰と仰らる福鳴市松と答奉りし
はゆきし心得あひ直し虎之助如斯と市松あり
り出よあもと元より仕なれたりののと同し列よ
めし仕あひし秀吉卿舌と振あてあをりし

おとろり日本一の大將軍たるべしとめてさむ
 ひしとつうて秀吉卿より遠州へ御使し淺野
 彌兵衛尉長政堀尾茂助吉晴と下さるつと自定め
 らしとつうり兩人於義丸とのへ参り遠州へ御使
 こしと下向仕りの別の御口狀と伺ひ申て参り
 こしと申と一時於義丸との折れし弓射ておと
 としと片手矢くひて彌兵衛茂助たりし承られ
 羽柴於義丸あしと濱松とのへ申へしと父の大
 納言殿より對あるへしと様やあると宣ひて直よ
 的よ向をさしと兩人と見向もしむるに兩人の濱
 松へと申たらんよん涙くともしむるんうり然

ら何とらひひらへしと心組て出たり
 小案の外ある事もとて大納言殿へ参りてりくと
 申たりしと秀吉卿より頼りしと子息得たり
 とつうり厚くめでありしとつうりその夜朝日殿
 於義丸とのとつうり居て濱松へ彌兵衛と茂助と下
 し誰しとも御使と遣はされ御手あれし調度あ
 との彼処よあると取上を給ひてんやと仰りし
 と於義丸との熟聞食て大方様のおし事と仰
 らるしとのうか於義丸の大納言との御子とく
 大方様の孫よの濱松あとのふ処よ親しとのものも
 いろぬの手馴たる調度あんとあゆひもよろばひ

大略証世編卷四

わづらひののの大納言とのへ申へくひといひあり
ら朝日殿の御膝と枕とくうくと寐入るふど
らも幼あしとて朝日殿も北の御方もいふい
とわづらひののよしあへうとて濱松へ淺野彌兵
衛尉堀尾茂助參着とてういほの諏訪の神主秋浦
う家と旅宿とて種々馳走あり其夜大久保次
右衛門忠佐と御使とて長途の旅行恙なく是すて
參向ありと祝着至極の由と演説ありと酒肴と
賜とて旅の疲も退すく氣の毒もいへとも明日
面會とてくへくひ由と申とていといと申述明
とて城中に請へ家老の面々何も出會てのち頃て

御所の御前と召と懇情と盡されうとも事終て
退出すく於義丸殿の事うるとありも仰出さるる
事あり彌兵衛尉茂助あり於義丸どの御勇くた
らへはゆいゆと申出たりしと御所仰らとて於義
丸とう申子息ゆいゆととも外へ養られたとて我
等う子とありべと仰られて其後何とも仰らと
と兩人よとよしなと事申出たりし心知く罷
退と秋浦の家と飯りつとて又御使ありと太刀馬
鞍なると賜り夜明とて御使鷹と手と居つと參
り此の隨分秘藏の逸物よひ鶴と扱とて慰あへと
て賜り其日一日狩らとて獲たる処の鶴とよひ

処^{こゝ}に^あら^はし^はと^切て^いら^ふは^し御^ご心^{しん}中^{ちゆう}と^聞人^{ひと}耳^{みみ}と^驚驚^{おどろ}け^り侍^{しやう}り^さ又^{また}於^お義^ぎ丸^{まる}殿^{どの}の^まま^に幼^お稚^ちの^{こゝろ}心^{こゝろ}あ^らう^道道^{みち}理^りの^{こと}も^然然^{しか}も^其其^{その}氣^き猛^{まう}く^其其^{その}勢^{せい}も^勝勝^{まさ}る^もと^尋尋^{たず}常^{じょう}の^{たぐひ}類^{るい}も^あら^はし^伏伏^ふ見^{けん}の^{うま}馬^ば場^ばも^内内^{うち}太^{たい}臣^{しん}殿^{どの}の^近近^{きん}習^{じゆ}等^{とう}と^共共^{とも}馬^ばと^騎騎^きと^いけ^るも^近近^{きん}習^{じゆ}衆^{しゆ}馳^ちり^うひ^さま^於於^お義^ぎ丸^{まる}と^のの^失失^{しつ}禮^{れい}も^たり^とて^於於^お義^ぎ丸^{まる}と^のの^技技^ぎ手^ても^見見^{けん}を^ば切^きて^落落^おち^あら^し外^{ぐわい}の^近近^{きん}習^{じゆ}衆^{しゆ}こ^のの^不不^ふ思^し議^ぎの^かか^ふこ^のの^内内^{うち}府^ふの^御御^ご家^け人^{にん}と^於於^お義^ぎ丸^{まる}と^のの^心心^{こゝろ}に^任任^まを^て討^うを^あら^しと^いは^しま^しつ^取取^と圍^ゐん^とと^さら^と見^{けん}あ^らし^馬馬^ばを^け居^ゐる^あい^うも^内内^{うち}府^ふの^御御^ご家^け人^{にん}た^らん^のの^於於^お義^ぎ丸^{まる}と^のの^失失^{しつ}禮^{れい}も^手手^て討^うや^らり^とあ^らし^心心^{こゝろ}得^え違^{ちが}ひ

於^お義^ぎ丸^{まる}恨^{にく}む^うと^仰仰^{おほ}れ^しう^のの^道道^{みち}理^りあ^らし^ハ口^{くち}と^塞塞^ふて^うの^居居^ゐる^たれ^の事^{こと}ハ^即即^{すなは}ち^静静^{しず}ま^りぬ^のち^内内^{うち}府^ふこ^のの^事事^{こと}と^聞聞^き召^{めい}何^{なに}と^も仰^{おほ}れ^し能^{あた}り^心心^{こゝろ}得^えて^意意^い外^{がい}あ^らし^と論^{ろん}し^あら^し未^また^のの^大大^{たい}將^{しやう}軍^{ぐん}と^喜喜^{よろこ}ひ^あら^し然^{しか}も^秀秀^{しゆ}吉^{きち}の^先先^{せん}鋒^{ぽう}と^して^西西^{せい}海^{かい}征^{てい}伐^{ばつ}南^{なん}海^{かい}退^{たい}治^ちの^元元^{げん}帥^{すい}と^得得^えた^らし^上上^{かみ}の^四四^し國^{こく}九^く州^{しゅう}の^をを^と追^おも^よす^の使^し者^{しや}と^馳馳^ちて^朝朝^あ集^{じつ}と^勸勸^{すす}む^べし^とと^土土^{つち}州^{しゅう}の^長長^{ちやう}曾^{そう}我^が部^ぶ九^く州^{しゅう}の^大大^{たい}友^{ゆう}嶋^{じま}津^つ伊^い東^{とう}龍^{りゆう}造^{ぞう}寺^じ松^{しょう}浦^{うら}大^{たい}村^{むら}有^あ馬^ば等^{とう}の^人人^{ひと}と^勸勸^{すす}め^りあ^らし^つも^秀秀^{しゆ}吉^{きち}の^大大^{たい}臣^{しん}も^昇昇^{のぼ}進^{しん}の^上上^{かみ}の^朝朝^あ廷^{てい}の^權權^{けん}要^{えい}當^{たう}路^ろの^將將^{しやう}相^{さう}と^のの^誰誰^{たれ}り^其其^{その}命^{めい}違^{ちが}ふ^とい^はし^海海^{かい}陸^{りく}遠^{えん}く^隔隔^へたり^てい

心よりうせさるることも多し中にも中國の毛利輝元朝臣の十餘州の大將より日本無雙の大名あるのちあつて吉川駿河守元春小早川右衛門督隆景兄弟より兵を練武を講し民とあはれと政を私あけしめられを梅よたとへ柳よあはれとて國人のいへて尊ぶることも類あり然るに元春隆景秀言の軍と治めあはれと尋常あはれととささう此人と中違ふていあはれとて元春の三男吉川民部大輔經言小坂越中守二宮左助と差添元春の名代として隆景の弟小早川藤四郎秀包と桂民部大輔浦兵部丞と差添隆景の名代として大坂に登を

あはれ海上順風穩ゆるり坂の浦に著しうら秀吉公の蜂頭賀彦右衛門黒田官兵衛と使として遠路参上と勞ひ吉川とい堅法寺小早川とい玉蓮寺に旅宿を翌日大坂の城へ登ると秀吉公面會懇意と盡されし山小獵海に漁とりける珍膳美味をべし有とあらゆる鮮味撰ひ新を挙て饗應の丁重かふと筆よも詞よも盡されし其後秀吉公吉川小早川初四人の老臣等を引連十四五許の小女み太刀持せ天守よのりて四方に指さしあはれ淡路嶋是は四國の山形り此方ハ攝津國あはれ丹波美作播磨備前と細やらみ告教へ其後經言を

在藏人み補下國の暇伐下され秀包大坂み
 逗留せさせむひみさ如斯て中國平均せし上ハ天
 下泰平遠やれ布と編戸の民皆其徳を仰きたり次
 秀吉公の弟小市郎秀長的美濃守成夫和紀伊の
 兩國の守とあり從三位の叙し權大納言任し大和
 大納言と稱し郡山の城入居しむ大和國ハ元來筒
 井順慶法印の國あり息り去天正十二年八月法印
 廿六歳とて早世ありて實子あり養子定次實ハ順
 慶の叔父左門順國の子あり依て是と伊賀國主と
 あり三万石と加え從四位の侍從とあるれしなり
 又三好孫七郎秀次とも秀吉公の養子とてて羽柴

孫七郎と稱しと從三位の權中納言とあり江州
 の國守とありしうハ安土の城とあり町家と八幡
 移して近江中納言と稱する柳江州ハ佐々木
 の元祖元近將監成頼宇多院天皇五代の後胤あり
 始て佐々木庄入住とあり以來その子章經近
 江國の押領使とありその子經方近江國總追捕使
 とありその子季定父と續て追捕使とありその子
 秀義相續とありその子定綱近江國の守護
 職とあり次男經高三男盛綱四男高綱備前安藝周
 防因幡伯耆出雲日向七ヶ國の守護職と賜り五
 男義清六男嚴秀とてありけるなり定綱の子孫二

大曆記十編卷五

四

流とつらと近江國と二つに分て江南の六角江北
 へ京極と稱しけるは六角の定綱十二代在京大夫
 義賢入道拔關齋承禎十三代右衛門督義彌父子信
 長公と戦ひ利と失ひ終江南の祿と捐て卒人し三
 州へ落行しつとも信長と憚りつとあひてあはれと
 扶助しあはれ甲斐國へ行て勝頼とたのむ居たり
 し勝頼亡ひしつともあはれ々漂泊しけるらちよ
 信長公御事ありて天下秀吉公に從ふ時とありけ
 るらちよ義弼の弟近江守義定秀吉公へめされ懸
 命の地と賜りけり秀次卿權中納言とて近江
 守と兼ふへ義定と中務大輔と改めける

流布本は佐々木屋形義秀の篤實の人あはれとも
 幼少より病身不して國のことと與らるる六角
 義賢入道兼禎一人して國政を專らふしつとも
 靈陽院義昭卿の御頼とも受奉らるりて信長
 のため深く疾まね承禎父子終に國を敗るる
 つら屋形義秀へ公方家と隨從をまねと常と
 思ふとつらとも承禎父子我意はよくして一向
 入屋形の意に從はれしと詮方ありけり
 義秀と秀吉との懇志と通をまねと舊交あり
 義秀は男子一人ありて秀吉公扶助ありて三方
 石余の地とあはれとつらとつら佐々木屋形と

つゝの六角京極両家の対あるとあり六角大膳大夫高頼永正十七年八月廿一日卒去但嫡子近江守氏綱ハ永正十五年七月九日父より先たつて卒せしより二男の相國寺吉侍者としてありけると呼むるへ家督といは是彈正少弼定頼の子義賢即承禎ありその子義治初ハ義弼といふ永祿四年父義賢隱居義弼家督となり同十年隱居廿三歳あり其蹟ハ弟近江守義定より然ると江洲志賀郡坂本雄琴村の地下人澤田武兵衛といひその子源内といふあり江源武鑑といふ書と偽作一高頼の子氏綱の子義實

といふありその子と義秀といひその子と義郷といひ其子と六角兵部氏郷といふ氏郷即源内なりこの説偽説あると前もあむくつて讀めり惑ふとありと根來の衆徒等一揆籠城の事并秀吉公紀州進發の事秀吉公をて内大臣に任し三公に列しあふに付て熟思ひ廻らさしけるハ我尾州愛智郡中村の民間に生きたれハ土民の中ニ生涯を送り歛鋤を取て出來秋と樂むる身ある故右大臣殿の御恩みより士とありつるたよ等輪も超たる福分と人

もあつのひ我身もおのひつるよのつら物頭とあ
り城主となり十萬廿萬の田地を領し終り一國二
國の主とありそれより五位より叙し四位より昇り三
位を経て今正二位の貴に至り官へ内大臣に陞
る抑内大臣ハ大織冠鎌足公よりしつととも
鎌足公のくち久く絶たりいと光仁天皇の御宇
藤原良繼藤原魚名等ひれよ任しあひそれより後
連綿たりいと天下泰平四海静謐の謀と一日も
くゆ開くへとて四國九州へ使者を下し私欲
のため隣國の境をふり他の所領を奪て己の
知行を増う如き濫妨と止め騷動と静め各々上洛

し朝息と報とてさしめと仰出されしとも海
陸三四百里を隔てし往還たゆとて一面の交あさ
吉公の武名を聞とつともいふ一面の交あさ
徒ハ天下の主將必定の人のなるとあひあ
らもこの上洛し誰に就て面會と遂んと不審ま
た少くも心よハ持あう思起し上りのま
に多めく四國の長曾我部元親ハ再三の使節と
受あう明白の返辭あし元親も織田殿に從
ひし身あう何とて織田殿の本意と繼て天下と泰
平よ治めんと云秀吉公ハ伏從をさるよおとつ
ハ強ち秀吉公の武威と嫉むといふもあは

又自立と企てて秀吉公と余所よとるものあり
 羨し土州長曾我部元親へ其身健し志雄しく軍の
 うちよりし者り河波の三好讃岐の香川伊豫の河野
 等の歴々と追落し四國と大形切取たりしは織田
 殿間食伊豫讃岐と獻して元親河波土佐西國を領
 一以て朝廷に奉公と盡とへし由御下知ありける
 小元親御請申ありし織田殿明智う為し弒とるこ
 ろひし其事無音ありしと今度秀吉公よ
 り織田殿御下知の通り早々二國と獻しとて故
 右大臣殿御法の如く仕まつと由御使と以て仰下

されける小元親何とらあひひけん御請延引しけ
 るより度々催促有しとる元親堅固田舎人
 て四國あり外に廣く処もなき我身の武勇あり
 ふりの絶て世間あるよりと我意一つよゆ
 て秀吉公とも軽々とあひ侮り元親昔の身よと
 あるはさも有へし今に四國の大將ありたと
 ひ信長存生よと云々と宣ふともたぬとく仰み從
 ふへしとも覺えびいんや秀吉とのあひ信長の
 草履取り成出て木下藤吉郎又ハ羽柴筑前守あ
 としひしものありそれり尤様と申とて畏入ひ
 との誰り申へし實は猿の子とりの世よの申あり

木下と云も羽柴と申と申も猿の縁うとおのこ
の由と申と云ていひし使者もあつたうり
其由と申と云ていひし使者もあつたうり
人との思食さうし然の御勢と差下され御征伐
あるべしと云ともまの近國と悉く平均しとて後
のとならるべし因て紀伊國退治あるべし彼國むら
河内和泉と共に畠山管領基國の領國ありしと
基國十代左衛門督昭高の時天正二年家臣游佐河
内守政賢といふの謀叛して昭高の居城河内國
高屋城におしよを合戦しけし昭高うあこび自
殺して城は即落たりけしとてのこら此三國ハ逢の

如く亂とけるうち紀伊國よの熊野の神領或ひハ
高野山の衆徒根來法師あつた何も富饒に任とて我
意はく真言秘密灌頂の靈場よ弓箭と貯へ甲冑
と弄ひ刀剣と試む王命と忽諸し武威と茂如と金
銀財寶と以て諸牢人と招き田畑山野と占て游観
榮耀の処とび是れ就て近里遠境といふは郷民の
内よ腕とさとり肘とさるめの悉く是れ附順と一
揆の如し信長公大坂の木願寺と攻めし時も紀
州一揆の加勢ありしうの本願寺毎度勝利と得た
うなり是ありとあつた守護の無故あつた
秀吉公の弟秀長卿と以て紀伊國守と定められた

ついでるより秀長卿も根來へ使者と遣り僧
徒の行狀と正し新義の密教と奉持し法燈の遠く
耀がんとと專といひつゝさる武備と指その家
よもあゝぬ銃炮と停止とへしと申遣りつゝこの
根來法師大に憤り何といひと僧徒の行狀と正し
くして武藝ととてよとて夫我山の覺鑊上人の遺
跡とて上の康治のむうより今に至りて四百四
十餘年の星霜と經とも國司守護の進退とつ
ど七十六代の御宇より百七代の御代まで三十二
代の聖主賢王更に四至境夷の内と監梅をび然
と秀長とい何のものと未聞とあるの頃成出て世と彼

是と沙汰とる秀吉の弟とあり云りあり勿体あり
置ぬと云て使者と追出しの由を秀長より
言上しつゝの秀吉公以外の外に怒らざるを以て惡ひ法
師原の口のさく様や畠山の時ハ所領とも減を
と祈禱修車料も多分と奪られしを思ひ及四百
余年守護不入といひ三十二代王法より料理せし
と云法師のふと偽と吐忘語戒をたうせし
なり他の領地と掠奪して竊盜戒とて合戦闘
諍の域より殺生戒と行し飲酒邪淫の兩戒ハ朝
暮に犯しつゝ破戒無慙の根來法師是を
禁め以り王政も武威も二つありと廢絶せし如

速に發向して是と踏潰とて定められしより先鋒の大將へ大和大納言秀長卿副將へ近江中納言秀次卿あり相從ふ侍大將へ堀久太郎秀政長岡與市郎忠興蒲生忠三郎氏郷長谷川藤五郎秀一高山右近大夫長房筒井伊賀守定次中村孫平次一氏蜂屋出羽守頼隆以下三万余人と云り
浦菴本より天正十二年三月上旬秀吉十萬騎を率し發向せし副將へ大和大納言秀長羽柴中納言秀次あり然し根來寺雜賀中として岸和田の並ひ千石堀積善寺濱の城三ヶ処要害を相拵へ逸物の弓究竟の鉄炮をあり籠込軍勢往

來の自由と妨げし是に依て千石堀の押へ秀次積善寺の押へ長岡兵部大輔父子蒲生忠三郎濱の城を中川藤兵衛尉高山右近等押へしけり筒井順慶長谷川藤五郎堀久太郎都合一万五千三月廿日未明に根來寺とて打ける云々とみゆ

秀吉公もよ御出馬あり黒田官兵衛尉加藤虎之助福嶋市松蜂須賀彦右衛門尉片桐助作平野權平等七万余より三月廿日大坂を首途あり泉州の賊徒の由と聞秀吉自身來るとい幸のことより一あて當て我々武藝のゆと見知をんとし岸の

和田と打て出千石堀の要害より山内三郎大夫高柳監物平井傳左衛門高松東内西郷平内大夫天井濱左衛門津屋孫九郎あとの雑賀の一揆と大将と一万余人根来の悪僧本坊岩崎坊あとの馳加りて五千余人なり濱の城より雑賀の一統鈴木土橋津屋原一万余人積善寺より根来法師那賀の郡のめの共一万余人たと秀吉公へう移て泉州より發向のよりとひあうことあひし根来も有勢の衆徒武勇の牢人多く此三所へさし向しあり然るに秀吉公は長岡蒲生より積善寺へ向て軍とて千石堀より秀次と大将とて

中村長谷川蜂屋と向られ濱の城より堀秀政高山右近とさし向む但急より攻へしと下知しむひ秀長卿より手勢一万余人し筒井定次三千余人御旗本衆二千余人とさし加へ一万五千余人と根来の本坊へ發向せし黒田蜂須賀兩人は一万余人とさし添三ヶ所の出城の兵ともこの落る道とさし切止むと下知しむ千石堀濱の城より秀吉公の御旗本根来本坊へよる由と知しりけるに積善寺より知大よ驚さるる秀吉よ計られたり本坊より敷のの居あはる老僧兒とももの外に地下人百姓の

老たるものいふなり何とて秀吉の猛勢を防く
 つまやうとて此処とて根来へ還り入敵
 と防く一とて残るニケ所は牒し合せん
 とも寄手とて間あひさしれもうあは然とて
 徒と日と送つらふあは我等とて寄
 手と打破り本坊へを帰り秀吉の勢の後より切
 りとて評定一決然ゆくと打出へと
 その用意とてなり

重修真書太閤記十編卷之五終

重修真書太閤記十編卷之六

根来寺衆徒退散の事

并後藤又兵衛尉基次の事

天正十三年三月紀州雜賀并那賀郡の一揆二万
 余人大和太納言秀長の領分泉州岸和田城と中村
 孫平次を籠り居たりと十重廿重を取巻入替く攻
 撃たり孫平次は世に聞えざる勇士あり弓鉄炮の
 足輕を揃え散々射さるとこの寄手のさうり疼
 んて見えたる処へ鷲直と突て出たると見て一揆
 の大将鈴木源左衛門尉同孫市天井濱土橋以下一

分の大事と進み戦ふ間城方より打負城中へ引入
けると一揆付入よさんとおめささげんて攻付あ
さりと火矢と放ちけるよより外構の柵へを打
破らしたる事とも中村軍ハ切者あり小荷駄の
ため立銅置たる雑役馬二三十疋と乗馬五六疋
一時切ていふ跡より急よ扣立しうの馬ど
も勿廻り狂ひまはりけるを見て是は蹴らしと
一揆等騒動し備へし事とすらび左右とるう
ち日既暮けしハ明朝を攻破らめとて一揆
ハ勢を引上たり大坂よ此由と聞と其より秀
吉公数万の大軍と率ひ七里の処とめよめあて

岸和田へ入る夜明けしハ一揆ともいひて當城を
攻落とへしとて鈴木黨土橋山内西口高柳原天井
濱平井的場佐武高松打越津屋高佛和歌東家根來
の松本坊岩室坊那賀郡の者とも相加らりて二万
余人たり一時乗破とてあめと叫んで攻りける
処ハ城の氣色何とやらん昨日よりりて覺ゆる
そと一人うのへをまて一人勢もりことと見え
るどあの旗馬印ハ荒手あるやと互ふ不審し三人
四人のつともあゆめ氣おきしとて進みうぬつ
るその間よりありあふのさして見あられハ櫓の上ふ
見あられ武者采俣取て下知とるありこと尋常の

者との見えび誰とあらんといふち山内三
即大夫とつと見て是は何さま凡人あつて
の秀吉あるへとつとつとよも城中の勢加
ふ相違あり今あら敵の模様と見てのちと少
猶豫しける処と見とよ中村孫平次弓鉄炮と左
右よ立て三千餘騎城門を開て切て出寄手あ
みとととや城中より切出るつと云程のちあれ
番ふ雑賀の者蒐合と散々よ攻戦ふ処へ城中より
荒千千餘騎切て出根来の衆徒の五千むりつと
おえさる真中へ切て入真一文字よ突たて切立
けるつとよ根来勢散々切負岡治兵衛坂東七郎次

即あつといふの死人の下み埋らとつと夜よ入
息出しうの這々逃て帰りつとつと右て根来雑賀
の者とも城中よ秀吉入るひつと聞て然ハ雲霞の
大勢あるへ容易よ陥とつとつとつと思ひつと吾
陣と堅くつとつとつと敵とつと攻つとつと云つと
あつとつと四十餘町引去積善寺よ根来の衆徒千石
堀よ雑賀濱の城よ那賀郡のの共屯とつと居
たつと秀長秀次両卿よ責とつと秀吉公ハ引違ふと
根来の本坊へ押寄ける由と積善寺よ籠りける根
来の衆徒等聞より寄手の有様と伺ひつとつと長岡
與市郎蒲生忠三郎四千余人と以てお寄備とつと

たためて扣え居けるゆえ扱ひ我等と此処に繋ぎ置
 つゝ為の謀あるまじう攻搦らんともさび徒爰
 備居るものあるべし然に此方より總勢一同に
 打立急よるをうけて攻戦さく敵とも思ひうけ
 なく驚さくさく敗走せん疑ひなり早く用意を
 するといひしめさ立に扱本岩室の両僧とくめ死生
 知との若大衆得めのえのものと引提五千余人面も
 ありげ門を開き一同に切て出長岡蒲生の陣へ會
 釋もあけうけ入一同に揉ゆあんとを働さける
 寄手の軍勢くくと見るまじく敵に打出たり
 脱とすうとう移て支度と事あるに驟雲の林と

出る如く場廣し出立をあつて中にも蒲生忠三
 即思慮深きものあれ根來の者どもあのと武
 藝とたのめ切て出寄手と一時に追散さんところ
 ありあへし然らば城中に定めく空虚なるべし引
 違つて城中へ乗入りと下知しげに蒲生の兵
 共打出たり兵士の眼もうけど差違へく城の
 中へ入んとは長岡の手の者も是と見て我劣ら
 と馳ぬひく進みけるま根來の衆徒に元より戦
 と好まば只切ぬげをやと思ふのまじく寄手の
 城に入んとするを見て暗く悦ひる幸のことなり
 此隙に馳ぬけりやと思つて後よ氣の付さるあり

しと真一文字よりけ通りけるり寄手の元より城
に入と専とひりり其うち小衆徒の飛り如く
雲と霞と走たりける寄手城に入てゐるゝ衆徒一
人もあつたこれハ長岡蒲生大に憤りこつてハ衆徒も
欺られぬるり口惜やと跡と慕ふて追ゆけと衆徒
既と遠く切脱て影も見えぬ衆徒ハ長岡蒲生とた
しぬさつて城と棄らるるりゝ落のひけるゝ敵数多道
と塞さけるゝ驚さつて見よハ黒田官兵衛蜂須賀
彦右衛門根來の衆徒の帰路と討んと構たりゝか
つ衆徒大に仰天つとと大膽不敵の悪僧ともか
とハ日頃の勇氣ハ今日あるとと死ぬの狂ひゝ狂

ひまくれハ黒田蜂須賀の手の者ゝとて立て隊伍
定まりびそれ此間ゝと衆徒ハ一方打破りせむ
馳走んとひりけるゝと黒田の手の者手まげくせめ
たりゝハ根來法師の中より關紀豪澤と云二人
の悪法師踏止まりて手痛く働さけるゝより黒田
蜂須賀の勢も疵と蒙りあるひハ討と去るゝハ此
二人よふをうれゝ根來法師大に退てけるゝ然
るゝ黒田の手より後藤甚太郎基次今年のゝる元
服とて又兵衛と名乗りの二人の法師と目よりけ
て切りゝとハ豪澤關紀と見と勢高けれと骨
の固りゝとハ但汝ハ心の剛と我等より向ふゝと

トさう相手ふととめとあめへとも法師の身よハ
 情か一首ハ汝預る七といふれ又兵衛をうと
 とや舌の柔うあるよまうとて左様のことと申り
 ぶそこのか退そといふまうと關紀ふ向ひ二尺三寸
 の大身の鎗上段下段とまうと追つまう川突
 合けるう又兵衛いらもして兩人のうち一人と
 仕留んと馬と躍と走りける關紀豪澤ハ歩立あり
 ろして後藤り馬の脚と薙けとハ馬ハたまう倒
 とけり又兵衛早業せと勝とつとハ下立あうと投
 突ふ突とて關紀ハ太股と突貫と尻居とと倒
 と起しも立ハ押うとつて首ととる豪澤ハ黒田勢

と戦ひ居たりける關紀ううとれと見ると其
 ろく走寄後藤を討んと大長刀と水車と廻して走
 りける後藤ハ豪澤と見返り關紀ハ往生と羨と
 死に來るうあ珠勝やと鎗取直ハ傍り母里太
 兵衛つと掛りて切るといふ又兵衛其方ハ
 あまうと大食あるとやさのむりてとていふ
 ハ太兵衛と譲りてといふれ又兵衛大と笑ひ
 此頃不食り繼と故坊主首あこと取たるとや喰
 あま御邊とあまきと云とて猶も向ふ稼と
 行豪澤ハ後藤を伐んとあめいとも母里とゆ
 つりて走去たり母里とも嫌ハ敵とあはれとも

大曆記十編卷六

關紀う敵を打めりし残念なりと氣とつち母里
と弓手より引請つ三尺七寸の大長刀拂ふて薙や
石突のほりてなりし手練の早業太兵衛ハ大太
刀振うてけ以て関けハ鶴の翼さうさうと打ハ車
の輪をよ向てまゝ切ハ右よ付入早速の達人雙
方名と得し武藝の名譽よ目さすく見えよけ
る勝負付祓ハより合て無手と組くむと其まゝ捨
合力足さうさうと響さ合押ハうへうさうさ
関さまゝハ揉合たりし豪澤ハ大カあり太
肉よと勢高し終り太兵衛とあし伏せと首と
んと腰刀とさうさうけるよいつハ鞘口とさう

刀ハハ太刀ハ投棄手ハあし押殺さんと咽
手とつひあしけると太兵衛ハ小男ハれと心利
たるものハ豪澤ハ肋とつとく蹴さうける
より少し疼んて見えける処とぬりハ終り豪
澤と討たりけり此二人の戦ハひまゝ根來の衆徒
本坊さうと引返と

大納言秀長卿根來寺へ押寄る事

并秀吉公謀畧の事

天正十三年三月廿日未明し秀吉公の御勢十万余
根來寺さうと發向しあし先鋒ハ大納言秀長卿相
從ふ侍大将ハ伊賀國主筒井侍從定次あり其勢都

合一万三千餘人とりや根来は秀吉の大軍押
 寄ると聞て大驚と如何とて衆徒の
 内よと身健よ心剛あるものの積善寺の城よこ
 向たよの本坊よの歩行たよ心よ任とぬ老僧ある
 ひの碩學者宿あんとつゝて物の用よたゞ又
 へ兒同宿あともくくの名乗とも更よとて
 一々びそれよ從ふ百姓一揆五千餘人よつゝ
 とも備もたゞ何とて世よ聞えとる秀吉と防
 くつとと戦ふ先あり知とてさるる範如蓮
 達雲海あといふ荒法師ともちとも恐とて老僧よ
 打向ひ申びるは是よと當山へ敵の寄来りよと度

度あとも終よ一度も寺中へ入とてあは是併昆
 留遮那如來の本土あるとて高祖大師祖師上人の
 擁護よとて然り今度とつゝとも更よとて
 もゆいび我等三四人の敵よ向ひて弓矢鉄炮と取
 碩學老僧達の本尊及ひ不動明王よ法敵退散
 勝利調伏丹誠と凝して祈りあへとてめく若大
 衆の甲冑と帯一弓箭と取根来の城よ拵結て待居
 たりとてくをさるるちよ寄手雲霞の如く関の聲と
 上りうの天地よ響とてあひたよとつゝあとも愚
 かり大和河内の勇士負と盡とて向ひとあとも
 鉄炮と放りうけ矢叫ひとて責りくる寺中よと

小勢ありしを玉薬の用意あり鉄炮の根
 本當山より傳えつる藝よてあまの名人上手も多
 ううげさよと大木大石と投うけつる先途と
 防さける辰刻のうめより午刻まで寄手入替く
 息とも繼をけ攻けし衆徒等も一世の大事と身
 命とあまの力とはく骨と碎りて防さしめと
 小矢玉の中りと疵とくみむる寄手頗る多うりし
 うの大勢とつへともたやとく責入りし時刻と
 移しゆると秀吉公御覽有て即時に旗馬印と巻と
 攻めくしと体よすしと引退さめんと寺中の大衆
 とつこ見と充りあるぬへ一先もあらんか縁て云

つる如く吾山の大日如來の本土あり不動明王の
 淨居あり秀吉如さう勢何十万と寄るとも如來
 の慈眼明王の縛の繩よりして進退ともよな
 るへさやとれ追掛て皆殺しをよとつよとふ
 そあま蓮達雲海あといよとやりせの大衆二千餘
 人鉄炮の筒先とをろくとつとあめいと走うと
 へ寄手の兵士何もあまのひ取りのめも取あへ
 び逃るし大衆のうかど得とらるや寄手の亂
 立たるを追やくと隊伍もをあへどむくくつと
 根來の坂と葛直より下とへ大納言秀長即時
 へへもこととれ返さや大うへへ返さよと下

知しむへ先鋒一万五千餘人面もあさび取てか
了衆徒と取込引はくも一人も餘さしと切てか
うる蓮達雲海ふれと見て然る寄手ふたなりと
そ大勢と取められてへうあふまじむや引返
柵のらちよ入て防げやとつへ大衆つのも仰
天し斯ての我山まき引くさのりあんやいも計
らさ丁をや口惜やとひふもあらしをび大和勢
あめさてうくさの根来の衆徒立足もあく敗走し
爰の谷蔭りふの山道なう求めて逃らさ又
へ窮て道あさ処よ行くうをんうあさし腹と
切人もあつ寄手の関と作りうけ付入し付入ん

と急し追うけ採たりしう蓮達雲海兩人もりく
てい如何とあひ切命ととく防くへ其隙よ
其方共いんや引入て柵戸とめかど盡しと能戦
へやと教訓し寄手よ向て待りけたりうぬてより
是等二人の世よ聞えし大カあり身丈六尺七八寸
肥ふとつて腕も臍も痛高く物具したる其間
の赤く黒ととよく見せし門よ立たる二王尊の
るさ出しり如くなり寄手の中より黒皮の鎧着た
る武者只一人進よりて大音聲よとねよ扣えし兩
人の根来よと第一の荒法師と覺えたり庶追ふ獵
夫や爪木たる松と相手の勇者よとくうくこらる

六門記十編卷八

痛し天野源右衛門男へと云ふ少さげと肝ふと
 加へるあけごと太刀の切ゆのつと一打し打切て
 異んとと四尺をうりの太刀打り飛りて雲
 海得たりと長刀とつ取振廻し一薙よあさ伏んと
 踊りうりて源右衛門足場くくして戦むんと請
 太刀よりうりて引けると雲海とて天野へ引豆か
 りとあさろ得てまゝ長刀と取直し根來山の衆徒
 のうち閣伽井坊の同宿雲海とて我事なり生國
 淡路の源氏あり年つりて三十五歳歸一法眼憲
 海より傳へたる鞍馬一流の劍法に我より対し誰
 うある又長刀の秘術とい飯篠長威の弟子常陸鹿

鳴の松本備前守の傳えさるるれや天野源右衛門
 と呼これ源右衛門りとも堪えぬ男あり歸一と
 もの松本ともつて我等ハ武藝の系圖あり勝と
 以て第一とことつひあさるるの大太刀と打り
 打り切りて雲海も莞尔と笑て長刀と水車
 廻し切搦り尤も右も塞つ開さる七八十合と戦
 りてされとも互も得たる名人達者つりて劣る
 と見ささるるされとも天野ハ小兵りて早うり
 けし踏あさるる下と打たる一太刀は雲海肩を切
 れてたあさるる処を天野得たりとまさ一太刀横
 拂へハ雲海ハ腹の下六七寸上さぬと切さる痛

手おれハをこもたまらば地を響かして倒るく
を天野まかさびかけよりて首打落し太刀貫を
只今まで鬼神の如き雲海を天野源右衛門打た
るぞと呼をれハ蓮達肝を潰しちかふとやおも
ひけん柵戸あり内へ走入逆茂木引て防さけり寺
内ハ老僧とも本尊の前ニ居あま降魔の利剣
と振て佛歎秀吉と誅しあくと丹誠をありける
処ニ寄手引色見えつるここのひしうんをこや
靈驗と顯るあふをよとつとめく汗と流して
祈念しける処ニ寄手大返し返して雲海うこれ
しうん衆徒よかたとわとて本尊の前ニ身をか

けうちて祈るゆと申刻もつる寄手よこら
立しうん何事やうんと見る処へ松本岩室の
両坊主歸り來りた衆徒大ニ力と得て是も明王
の加護あうんと喜ひ勇と猶も本尊とをめ奉りけ
る又々の松本岩室の両坊主積善寺と出し時ハ五
千餘人ありしとも処々を討とつるよ三千餘
人よとやうく爰ニ歸り來り見つととも寄手十重
廿重ようこと居たどい入つと様あくつとせん
となめらひけるを秀吉公御覽ありと先鋒へ仰遣
ていさしげのあし見えし勢ハ根來法師の積善
寺より落來るののあふと支えの味方を

くらく討るる道を開てとやく寺中へ入しむへ
しとありしうの秀長卿實めとあつれ陣を左右
へ分中と開て通されしうの岩室板本の両坊主大
まよろこび速ま寺中へかけ入たりゆらてだま強
勢は防ぎ居たり知るう三千餘人の荒手加るうめ
れハ龍の雲を得虎の風よあふかふ心地して勇む
とをねえだし秀吉公この者共を外へおらば根
來寺内へ集め置只一時は打もさせんとの謀と後
みぞおもひしうらねる

重修真書太閤記十編卷之六終

